

研究ノート

河村幹雄の思想と運動

塩 出 環

目次

はじめに

一、河村幹雄とキリスト教

二、国家主義へのアプローチ

三、国家主義とキリスト教からみえるもの

おわりに

はじめに

本稿では、原理日本社の有力な支持者であった河村幹雄という人物の思想形成プロセスとその歴史の意味を、ごく基本的な問題を整理しつつ、その思想と運動に関して、キリスト教と国家主義思想との接近という視点から解明を試みたい。大正から昭和にかけて活躍し原理日本社の実質的な主宰者であった歌人・三井甲之は、河村の思想解明の上で重要なファクターとなるので、三井甲之の影響という点も考慮に入れつつ論を進めていくこととする。そして、

河村幹雄という人物を歴史的にどのように評価すべきかという課題について、筆者なりの方向性を示したいと思う。

河村という人物は、アメリカへの留学経験もあり、みずからキリスト教徒であることを告白している。キリスト教徒でありながら国家主義的思想を持ち原理日本社と関係していたこと自体、極めて異例であり、その特殊性という点のみにおいても研究価値があるといえる。西洋思想に直接的に触れ合った人物が、どのような契機でどのように国家主義的思想へと転化し、その思想の内容とは、どのようなものであったのかについて考えてみることで、既に筆者が一部明らかにした日本における原理主義の運動と展開に関する研究のさらなる深化に寄与することになろう。これらの作業は、ファシズム思想確立プロセスの一端を明らかにすることにもつながるだろうし、日本ファシズムの特殊性の解明にも貢献することになるであろう。

河村幹雄という人物自体、これまでの学術研究において取り上げられることは、ほとんど皆無であったといっている。河村自身を個別かつ単独で取り上げた学術的論考はもとより、その思想や行動が議論された論考は少ない。占部賢志氏が雑誌『祖国と青年』の「甦る歴史のいのち」のコーナーで計四回にわたって連載執筆し、その人物と思想の一端を紹介した程度である。^①河村幹雄を直接取り上げた著書として、河村の論文と河村の友人・教え子などによる思い出・回想から構成される斯道会『河村幹雄博士遺稿抄』（井上書房、一九六二年）と、これを再構成し加筆された榎本隆一郎編『河村幹雄博士の生涯と思想』（原書房、一九八〇年）が存在するのみである。『祖国と青年』における占部氏の一連の論考は、河村の唱えた教育論の紹介とそれに絡んだ思想紹介程度であり、彼を歴史上どう位置付け、どのような評価を与えるのかについては、明確になっていない。それは、後者の二冊についても同様である。

河村幹雄自身の著作は、笹月清美編『河村幹雄博士遺稿』（河村幹雄博士遺稿刊行会、一九三三年）、河村英雄『名も無き民のこゝろ 河村幹雄博士遺稿』（岩波書店、一九三四年）、^②『河村幹雄全集第一巻』（惇信堂、一九四五年）に

まとめられているので、これらの基本文献を中心に、河村と原理日本社との関係を視野に入れつつ、河村の国家主義論の成立と内容について考えてみたい。

一、河村幹雄とキリスト教

占部氏や榎本氏の研究でも触れられているが、最初に河村の経歴についてごく大雑把ではあるが、整理しておきたい。後に触れることとなるが、経歴の中に彼が国家主義に転化するきっかけが存在すると思われるからである。

一八八六年六月二十九日、北海道石狩国札幌郡札幌区北五条東一丁目一番地に出生。父・菱太郎は大分出身の陸軍軍人（陸軍大尉）、母・さだ（東京出身）。兄弟は兄・重幹（海軍少将）、弟・脩（海軍機関少佐）^③。一九〇三年、東京・日比谷中学卒業。翌年、海軍兵学校を志願するも体格検査で不合格。一九〇五年八月に第一高等学校に進学した河村であったが「海軍への念願はどうしても思い切れず、兵学校が駄目なら造船官となって海軍にご奉公しようと考え、高等学校の二部甲類（工科）を選んだとのことである。併し（中略）博士の向学心は工科で満足出来ず、人文科学と縁の深い地質学に進むため高校三年で理科に転じた」という。一九〇八年九月東京帝大理科大学地質学科入学。一九一一年七月に東京帝国大学理学部地質学科を卒業、九州帝大工科大学講師に就任。翌年、助教授。一九一九年同大学教授、理学博士を受ける。翌年、工学部長就任、一九三〇年五月、私塾・斯道塾を開設し、青年達の育成を試みる。一九三一年一月二七日、四六歳で死去。死亡時には「特旨により位一級を進め、正四位勲三等に叙し、白絹二疋を下賜」されたという。一九一六年二月から一九一八年七月までアメリカへの留学をおこなっている。ここで河村の思想を決定付ける出来事があったと思われる。これについては、次節で触れることとし、以下では、キリスト教と河村

との関係について述べてみたいと思う。

河村がキリスト教徒であったことは、斯道会『前掲書』、榎本『前掲書』に残されている証言からほぼ間違いないと思われる。前者において、九州大学教授であった松尾春雄氏が「河村先生とキリスト教」という題で、和栗明氏（九州大学名誉教授・久留米大学学長）が「基督教徒としての河村先生」というタイトルでそれぞれ執筆している。後者においても、キリスト教徒であったという記述が散見される。⁽⁷⁾

では、いつごろどのような経緯でキリスト教の洗礼を受けたのであろうか。一高の級友であった上田大助氏は次のように書いている。

卒業後四年程経つてのことかと思ふ、当時私の居た川崎の鉄道官舎へ、或る日突然訪ねてこられて、久振りに大いに快談した事があつた。丁度基督教に入られて間も無くのことであつたので、宗教の話も大分出た。其折の話に「僕が基督教に入ったのも君に関係があるから報告旁々来たのだ」と言ふ様なことであつた。（榎本『前掲書』二六頁）

この記述が正しければ、河村がキリスト教の洗礼を受けたのは、一九一五年ごろということになる。笹月『前掲書』には、河村の日記の一部も収録されている。この日記を読む限りでは河村がキリスト教との関係を直接的に記述しているのは、一九一四年の一〇月一日の記述である（八四二〜八四三頁）⁽⁸⁾。上田氏の影響を受けてキリスト教に入信したとも考えられるが、ともかく河村のキリスト教への入信は九州帝大で教鞭をとるようになってからの一九一三〜一四年頃であるとするのが適当であらう。河村本人は、キリスト教の洗礼を受けた理由について直接記述していない。

筆者自身もその予想さえつかない。ヒントになるとすれば、次の記述であろう。

先生は福岡市呉服町の組合教会、米国の開拓時代にあったような小さい粗末な教会で古武士の俵のある中村正路牧師のもとで受洗された。しかし先生は普通のクリスチャンとは違い、エマーソンなどと同じユニテリアン派で、キリストの男らしさ (manhood)、祖国愛に共鳴されたのである。(和栗明「前掲論文」⁹⁾)

まず、指摘しておかねばならないのは、河村が洗礼を受けたのは、ユニテリアン派の日本人牧師からであったということである。実際にユニテリアン派がここでいわれるような「男らしさ」「祖国愛」を主張しているのかどうかはここでは別として、キリストの中の「男らしさ」と「祖国愛に共鳴」したという和栗氏の説には一応の説得力があると言わねばならないだろう。こうした要素を見出したからこそ、河村が後に三井甲之と懇意になったともいえるのである。三井甲之の歌人としてのスタンスは、万葉集を重視した所謂「ますらおぶり」を強く支持していた。

では、河村はユニテリアン派のキリスト教と三井らの唱える日本の「原理主義」をどのように結び付けようとしていたのか。以下で少しばかり、その方向性を検討してみたいと思う。

二、国家主義へのアプローチ

最初に検討すべき課題としてあげたいのは、河村が国家主義に接近するようになった契機に関してである。河村の思想的転機は、河村がアメリカに留学している間におきた。アメリカでは、河村の日本人としての民族意識を喚起す

る出来事があった。

南部旅行中の三宅さんから昨夕来た手紙の中に、ケンタツキーのレキシントンで大学向のランチ屋に入った処給仕を断られたと云ふ事のあつたのが頭を往来して仕方がない。我々日本人が理知に於て白人に劣つて居るからと云つて排斥するならば我々は理知に於て彼等に劣らぬ事を証拠立て、見せる事が出来る。我々の道徳が白人に及ばぬといふ根拠に依つて我等を排斥するならば我等は反証を挙げて其の僻見の謂れない事を示してやる事が出来る。(「日記」大正六年四月廿七日付、笹月『前掲書』八五四〜八五五頁)

河村の見たアメリカは、人種差別のアメリカであつた。日本人に対しても人種差別の目は向けられ、単に日本人とだけで差別されるアメリカに対して不信感を増して行つたことはことは想像に難くない。⁽¹⁰⁾河村自身アメリカでの黒人の様子をつぶさに見て「我輩は我田引水かは知らぬが大和民族が皮膚の色に対する僻見が無いのみならず、人間を平等に見、他人の意志・自由を尊重するといふ人間共同生活に最も必要な要素を多く具備して居りはせぬかと思ふ」⁽¹¹⁾という一文を書き残している。人種差別の残るアメリカで、河村もそうしたことを直に体験し、見聞したりしたこと、考えられることであり、これによって自由の国アメリカの名目と実態とのギャップから、彼自身も民族意識を強めて行つたことは十分に考えられることである。

河村は「亜米利加に来て得た利益。(中略)一、愛国心を養ひ得た事。二、日本の美点と欠点を明らかに認め得た事。三、亜米利加の美点と欠点を認め得た事。」⁽¹²⁾と書いている。アメリカ留学が、河村の中に日本という国・民族に対して強烈な意識を目覚めさせたことは、間違いないといつてよいだろう。

注意しなければならないことは、河村の意識の中に眠っていた愛国心は、アメリカ人によって揺り起こされ、アメリカでの生活を通じて民族意識が喚起されたという事実である。河村自身「昨日は徴兵令が上下両院を通過した。小・中学・大学の男女学生のアメリカ・ファーストの示威運動、軍隊的教練をする健気さ、交際社会の婦人迄が野営、通信、伝令、運輸等に従事する練習を始めて居る。男女の斥候隊の活動、有志者の軍隊教練、女子の入隊募兵勧誘等の目覚ましいものがある。活動写真館、寄席、劇場では開幕前に国旗を映出又は照出して国家を奏し満場起立する」と書いており、アメリカ人をとる愛国的行動によって、かえって日本人と日本という国に対する意識の相違について自覚を促されることとなった。河村が受けた明治時代の教育、彼の家庭が軍人一家で本人も軍人志望であったという環境も当然考慮すべきであろうが、河村は矛盾に満ちたアメリカ合衆国という国の資本主義と自由主義とを直接体験することで、合理的な西洋的思考法を身に着けるよりもむしろ国粹的な民族意識を強めたことが河村自身のアメリカ留学の意義といえるだろう。

そして河村は「日本国に之れ丈けの愛国的真情の発露を（中略）見ることが出来ようか。（中略）日本に生まれ育つた純粋の日本人にして渡米以来一二年の欧洲移民がアメリカに対して抱いて居る丈けの愛国心すら有たぬものがありはすまいか。アメリカの為には死んでもよいと思はす丈けのものが此の国にはある。日本の今の状態では国民に死んで守る丈けの価値があると思はす丈けの内容が何処にあるか。——ある、確かにある。然しながら之を自覚して居る者は少く且つ其の貴い内容のまゝで推移して行けば遂に無くなつて了ふ運命にある」という¹⁴言論は、彼の当時の日本人の国家意識の希薄さに対する危機意識の表れでもあった。

この問題の解決の矛先は日本国内の学校教育に向けられていく。河村は、一九一七（大正六）年の日記の六月三日の欄に次のように書いている。

アメリカでは大学が愛国心の養成さるゝ源泉であるかの観がある。日本では、小、中、大学と進むに従つて愛国心を鈍らす様な空気が増して来る。斯くて小学時代の愛国者も学校を卒業する頃には日本人でもない外国人でもない非人間が出来上る。アメリカでは教育のある階級が国家的自覚あり国民の責任を知り難に赴くといふ極がある。教育は国士を作るを以て本義とする。アメリカの教育は正に其の目的に適ひ日本のは然らず。(「日記」大正六年六月十三日付、笹月『前掲書』八六一頁)

河村幹雄の研究である占部氏の論説が自明のこととして論じている河村の教育に対する関心の背景には、こうした学校教育に関する不信感が存在していた。学校教育を変革するという意識は、思想学術革命を唱えて、教育改革——特に帝大改革を叫んでいた三井甲之らの思想と共鳴したことは容易に想像されるだろうし、三井らの原理日本社の思想と一層強く結びつくような共通した意識基盤が、ここに出来上がった。そして実際、河村自身も、三井甲之に近づいていく。

河村が、いつどのようにして三井甲之という人物を知ったのかは分からない。しかし河村自身が、アメリカ留学から帰国後に九州帝大内に文科大学——文系学部の設置を模索し、そこに三井甲之を招くことを画策していたことからも理解できるように、¹⁵⁾アメリカ留学中に、三井らの唱えた「原理日本」という思想を受け入れる下地がかなりの程度まで出来上がっていたと見てよいだろう。

河村と三井甲之の思想との接点についてももう少し敷衍しておこう。既に一九一七年の段階で、河村が三井甲之を知っていたことは指摘した。河村の日記では、大正九(一九二〇)年八月六日に三井の自宅まで訪問する記事もある。

実際どこでどのように知り合ったのかは全く分からないが、三井が歌の選者をしていた雑誌『日本及日本人』を通じてであると思われる。¹⁶しかし、これだけで、河村が国家主義に転化したと断言するのは、早計であろう。筆者は、もう一つの要因、一九二一〜二二年にわたっておこなわれたワシントン会議の影響が、直接的ではないが、何らかの形で表われているのではないかと思う。河村が直接にワシントン会議について論評した言説は見当たらないが、この時期、すなわち一九二一年以降、河村の反米的で国家主義的言論が、目立って増えてくるためである。河村の代表的論述の「国防の将来」(「前掲、名も無き民のこゝろ」所収)が書かれたのは、一九二三年である。この論文は、国防のためには教育、とりわけ日本人としての民族精神の涵養を重視した教育を施すべきであるとする内容のものである。この中で河村は「露、独の思想に次で最近我国に害毒を流しつゝあるものは第二の独逸たるべき勢いを示して居る米国の思想、風習であります」¹⁷と書いている。ワシントン会議でアメリカの提案を受け入れる姿に、日本の国民がアメリカの文化・風習を何の疑問も無く受け入れる姿を重ね合わせたのではないだろうか。以下の河村の記述は、それを裏付けているのではないだろうか。

現代青年の思想的特徴中国防的見地より注意すべき一傾向は非祖国的、對外屈從的と見ゆる迄に国民的自尊心を欠いでをることあります。外国文化を摂取同化することは真に望ましいことではあります但し現代青年が外国人の名を口にして得々とし、他人の口にする外人名を知らざるを耻としてをる心理に注意致しますと、正に外国文化に対する奴隸的屈辱であることが認められます。(中略)自由とか、解放とか自覚とかを口にしながら我と己を耻づべき外人の奴隸として覚らざる無自覚実に憐むに堪へております(河村幹雄「国防の将来」『前掲、名も無き民のこゝろ』二〇〜二二頁)

河村自身、西洋思想そのものは排撃していないこと、日本の思想を以ての西洋思想の日本的な順化が不充分であることに對して不満を言い表している。外国文化を昇華させ日本化することなくしては、日本人は、いづれ精神までも全て西洋に絡めとられてしまふと考へたのであろう。そのために必要不可欠なものとして河村が強調するものが民族教育ということになるのである。

国防を基準として教育を検し、(中略)我教育の誤を顧みる時我等は我国防の将来が空前の危機にあることを認めざるに参りませぬ。今日我等が教育の革新を實行せぬならば我国防は其の拠る處を失ひ、国防の主体たる国民精神は萎靡凋落する外道ありませぬ。(河村幹雄「国防の将来」『前掲、名も無き民のこゝろ』三四頁)

民族教育を考へていた河村にとつて、三井甲之の「原理日本」思想は、その思想方向と合致していたのである。河村は一九二二年の段階で、「原理日本」という用語を使用している。河村がどのような意味で「原理日本」という用語を利用してゐるか、見てみよう。

外国より輸入すべき思想絶無なりといふに非ず。輸入の要あるもの決して少なからず。実に今日に至るまで輸入せられざるが不可思議と覺ゆるものすらあり。アメリカニズム、アメリカ・ファースト、アメリカニゼイション之れなり。(中略)余は之を日本語の生命によつて日本国民生活に攝取同化せむとするなり。曰くAmericanismは日本精神、America Firstは原理日本、Americanizationは日本化運動之れなり。即ち余はアメリカ合衆国に於ける

アメリカニズム、アメリカ・ファースト、アメリカニゼイションより学んで『日本精神』を仰ぎ我等一切の行動を『原理日本』によりて決定し、斯くて『日本化運動』を我等の祖国に盛ならしめむとするなり。(河村幹雄「アメリカニズム」『前掲、名も無き民のこゝろ』二〇八〜二〇九頁)

河村がとらえた「原理日本」とは、祖国第一主義とでも言えば適切であろうか。アメリカ人の愛国的態度を見た河村が、民族意識に目覚める契機となったことは既に指摘したが、河村の主張は、大正デモクラシーによって広まった民主的・自由主義的思潮に対抗して日本民族意識と愛国心を強調し、国民思想のベクトルを日本という国家、民族に向けようとするものであったと言えるのではないだろうか。河村の「我新思想家を自負する輩は愛国心を旧道德或は奴隷道德と晒ひつ、愛国心を中枢として営まれつ、ある米国々民生活を非議せざる所以は何ぞや。(中略)之れ実に彼等の外国文化に対する盲目的・屈従主義的奴隷根性の保持者たるを示す。自国文化を否定するは自己の存在を否定する所以なるを知らず¹⁸⁾」という言論は、そうした立場をよく表している。この言論は、愛国主義を否定し、国家意識を希薄化させた人々、社会主義や自由主義言論に対する河村なりの批判の意思を含んでいた。河村の日本に対する意識は、原理日本社の説く、日本と天皇制とに至上価値を見出し、これを国家的指導原理にしようとする日本「原理主義」思想に完全に飲み込まれていた¹⁹⁾のである。

河村の思想の特徴は、日本的な「原理主義」思想にキリスト教が関与してくるところが大きな特色である。次節では、その関係について若干の考察を試みたいと思う。

三、国家主義とキリスト教からみえるもの

ここでは、河村にとってキリスト教がような意味を持ち、それが国家主義とどのような関係を持つのかについて考えて見たいと思う。

彼自身がキリスト教徒であることを宣伝する際に強調したことは、キリスト教と社会主義・共産主義との関係であった。

耶蘇を以て階級打破、因習道德蹂躪を企てた社会革命者と見做す如きはその最も顕著なるものであるが、現日本の社会主義者、共産主義者、無産政党創設計画者等の間に嘗て基督教徒であつた人物が少からず加はつて居る事情などを顧れば、深く研究もせぬ局外者が斯かる見解を抱くのも無理からぬことである。(河村幹雄「耶蘇と国家・社会及び経済問題」笹月『前掲書』三〇九頁)

ここでも見られるように、キリスト教⇨社会運動・共産主義などといった図式に反発を示している。当時の社会運動のリーダー的存在であつた安部磯雄・鈴木文治などは、キリスト教徒であり、とりわけ鈴木は河村と一緒のユニテリアン派の信者であつた。河村は社会主義・共産主義の単なる批判に止まらず「今日我国に眞の基督教徒があるならば、それは大正日本のサドカイの徒たる偽新思想家の楽天主義と戦ひつゝ、一方には大正日本のバリサイの徒たる偽忠君愛国思想家の形式主義の誤謬を指摘する務を果すべきである」と述べて、むしろキリスト教徒としての立場から社会主義・共産主義と戦ふことの必要性を主張する。

河村を国家主義者にする決定的な契機となったとまでは言わないまでも、そうした方向を加速させたのが三井甲之との出会いであり、三井の精神文化重視の思想であった。前節でも触れたように、アメリカ留学中にアメリカ人の強烈なまでの愛国主義的行動に接した河村にとって、それはごく当然のことであったのかもしれない。

河村がキリスト教と日本の国体ニ皇室・天皇を結び付けようとする傾向は、一九二〇年には存在していたとみなしてよいだろう。河村は一九二〇年に発表された「祖国民衆主義と基督教」という論考において次のように述べる。

我等はいま職業の別、地位の高下、学識の有無、老若男女の分なく、国民こぞりて五体を地に投げ懺悔求哀すべき時である。『それ我来るは罪ある人を招きて悔み改めさせんが為なり』（マタイ伝九章一三節）と祖国民の迷へる羊の如くなるを救はむとして生命を捨てしキリストを学ぶべき時である。かくて祖国の生命の為め、政治家も、文士も、軍人も（中略）華族も、平民もあらゆる誇りを捨て、小さな異同を忘れて協力一致して勤労を捧ぐる時、ひとしく仰がる、は歴史的に我等を統べ給ふ皇室である。何処に誰が階級貧富の差を痛痒と感ずるか。真のデモクラシーは茲に実現され階級戦は消滅する。（河村幹雄「祖国民衆主義と基督教」笹月『前掲書』三六〇頁）

愛国的・祖国第一主義的傾向を反映し、キリスト教の存在意義を日本の民族の統合原理としての天皇と結び付けようとする姿勢が、この河村の言論から理解されよう。河村は、キリスト教と愛国主義・祖国第一主義とを結び付け、それを天皇という原理で以て包摂しようとしているのである。

さらに河村は、西洋文化・西洋精神の象徴とも見られるキリスト教を信仰すべき理由について、音楽・美術・文学・哲学などの「精神の働きに依る」文化は精神性において日本の方が勝っていると前置きした上で、以下のように

述べる。

只一つ西洋から学ぶ精神的の働きに依るものがあります。それは何か、キリスト教であります。此のキリスト教だけは学ぶに足るものであります。然し之とても西洋のものではない、東洋のものであります。而もその真髄は家を本として居ります。さうして天国といふものは斯くの如きものであると云つて居り、神と人との関係を父子と言つて居り、キリスト教の真髄本領は家を本として居る。之は日本に於て始めて会得出来るものであります。西洋人では出来ない事だらうと思ひます。それでキリスト教を西洋から学ぶ事は間違ひでありまして、之は日本のものであります。(河村幹雄「新尊皇攘夷論」『前掲、名も無き民のこゝろ』二二六九〜二七〇頁)

キリスト教でさえ西洋のものであることを受け入れていない。そればかりか、キリスト教は東洋発祥のものであり、日本人であればこそ受け入れられると説く。確かに地理上の区分から言えば、キリスト教の発生は東洋ということになる。しかし、キリスト教が普及、発展したのはヨーロッパであり、西洋の文化・精神そのものもキリスト教によって規定されてきたという事実について、河村は一切触れていない。

こうした点を河村自身がどれほど自覚していたのかどうかは分からないが、日本とキリスト教を結びつけるための理論として導入したのが、キリスト教における神と人との関係であったのである。河村によれば「祖国を信じ国民の生命の自然なる開展を祈念する者が、外来の事物の一として基督教を撰取するも何等祖国に對する忠誠に於て欠くる処なきのみならず、ナザレのイエスの道は刻下の日本の支離滅裂なる思想界に光明を投じ国難を救ふ原理・祖国民衆主義を一層明かに照し出すと確信する」ことができ「古神道信者と大正日本の基督教信者とは新旧思想の対立の如く

外観的には著しい対象を示すけれども、実は同一の原理によつて生くるものである⁽²¹⁾というように、キリスト教と愛国主義、神道との接点と同一性を強調する。河村は、ここに天皇を頂点とする家父長的国家体制をダブらせていたということが出来るだろう。

河村が、この理論をさらに敷衍・強化するために取り上げたのが親鸞の思想であった。日本における右翼・国家主義者には日蓮と親鸞の信奉者が多い傾向があるが、親鸞とキリスト教を結びつける作業、それが例え、こじつけに近いものであったとしても、キリスト教信者であった河村にとっては、そうしなければならぬ理由が存在していたのである。河村に思想的な面で影響を及ぼしていた三井甲之は、独自に親鸞研究を残すほどの親鸞研究者でもあった。⁽²²⁾

河村は親鸞とキリスト教の関係についていくつかの論考を残している。河村と親鸞との出会いはいつごろなのだろうか。「基督の信について祖国愛のうかゞはる、節々」(『前掲、名も無き民のこゝろ』三四一頁)において「大正十年三月親鸞と基督の宗教に関する卑見の摘録を認めて三井甲之兄の覽に供した」とあることから、一九二二(大正一〇)年には、親鸞の思想に接していたことになる。この際に河村が気づいたのが「新訳福音書中基督の信仰の特色を表して居る」「極めて著しい特色の認めらるゝ、」箇所が「基督の祖国愛を表す節々であつた」という。その結果「親鸞に関して発表さるゝ、信頼すべき研究から学びつゝ、福音書を通じて基督を覗ふことを試みるとき、驚かるゝのは現在の基督教と真宗との差異が甚しいにも拘らず、各の宗祖の信の酷似することである⁽²³⁾」という結論に至つた。河村は親鸞とキリスト教の接点をどこに、どのように見出していたのであろうか。

キリスト教と親鸞の教えについて、河村は「両者とも非現世利益的ではあるが、同時にまた厭世的また偏狭道学者的でないことが一致している」⁽²⁴⁾「人生の罪深きことを痛感したもの、心にやどる懺悔の宗教が、耶蘇及親鸞の宗教である⁽²⁶⁾」と外面的な一致を述べ、教義としての共通点として「いづれも内よりの変化を力説し戒律を排し外的には寛容を

示しつゝ、内的には調和の世界が開展せらるべきを教へて居る」⁽²⁷⁾と両宗教の近似性と一致性について強調する。また、それぞれの教義の言い回しについて「耶蘇も親鸞も屢々パラドクシカルないひあらはしを為ることは外形的類似の一例に過ぎぬが、これは両者の宗教が心理的総合芸術的であることを語るものである」⁽²⁸⁾と指摘して、キリスト教と親鸞の思想を「心理的総合芸術的」と位置づけていることも河村の特徴である。この「心理的総合芸術的」が具体的に何を意味するのかについて、河村は明確な答えを与えてはいないことも付け加えておきたい。

河村によるキリスト教と親鸞と結び付けようとする言論は、大半が一九二一年「基督教と親鸞」、一九二二年「基督教の信について祖国愛のうかゞはるゝ節々」においてなされたものである。この時期は、河村が三井甲之らの唱えた「原理日本」を使用していることは既に指摘したが、河村自身がキリスト教と親鸞とを結び付けようとしたことは、この河村の思想的变化とも無関係ではないだろう。

河村についての唯一の研究書の著者である榎本は「基督教の信仰と日本精神とが融合すべきであると説いている。仏教も儒教も日本精神も相融合して日本仏教となり、日本儒教となって日本民族の魂を育んだことは歴史の示す所で、基督教も亦斯くあるべきを説いた」⁽²⁹⁾と述べているが、一方でそれは「今日の正統派信仰から異なっていて、博士独自の信であるように思われる」⁽³⁰⁾と指摘するように、かなり特徴を持ったものである。この河村の思想を原理日本社同人の木村卯之が述べるような「イエスの信の日本精神化」⁽³¹⁾との見方は可能であるが、著作を見る限り、河村は、キリスト教と親鸞の相関性・類似性を指摘するのみに止まり、理論化・体系化したわけではなかったという点に留意すべきであろう。河村にとつてのキリスト教と親鸞の思想は、彼自身の民族意識と国体とを強烈に意識させ、国家主義的思想とキリスト教を結びつける一つのファクターにすぎず、キリスト教と親鸞の思想との理論化・体系化などは二次的だったのかもしれない。

おわりに

河村のような人物が、斯道会という私塾で、後に社会的な影響力のある人物、旧麻生セメントで会長を務めたことのある麻生太賀吉、国文学者で福岡女子大教授を勤めた笹月清美などの人物を再生産したという事実、当時、天金のハードカバーの『河村幹雄博士遺稿』や『名もなき民のこゝろ』という著作集が岩波書店が版元となり十数版を重ねたという事実をみても、日本のファッショ体制を支えた思想が一定の支持と影響力を持っており、今なお一定の勢力を維持していることが理解されよう。

最近、蓑田胸喜、三井甲之といった原理日本社同人の研究が、竹内洋氏らによって行われており、筆者自身も竹内氏らに対する反論や、竹内説とは全く異なる原理日本社の位置付けを拙稿におこなってきた。⁽³³⁾ 拙稿や竹内氏らの研究もあり、原理日本社同人に関しては、ある程度までの議論は進んだとは思っているのだが、主宰者・三井甲之の思想が我々の想像以上に根深く日本社会の底にまで浸透し、今なお、その命脈が保たれていることは、意外と知られていないように思われる。⁽³⁴⁾ 三井やそれを支持した河村らの立場を国家主義とか、右翼とか大正デモクラシーのなかで出現した国粹主義と総括してしまうことはたやすい。しかし、そうした態度は、現在にまで一定の影響力を持ち、彼らの思想やそれを受け入れ、支持してきた勢力が現存するという事実と日本社会の実体とを意図的に捨象、単純化するこ
とになり、歴史学という学問の本質的な存在意義を捨て去ることにもつながりかねないのではないだろうか。

本稿を閉じるにあたり触れておかねばならないことは、ここに書いたことで河村に対する全てが明らかになったわけではない、ということである。思想的な形成プロセスやその内容に立ち入る余り、彼自身の歴史的評価に関して十分

に検討・言及することはできなかったし、河村が主宰した斯道塾に対する筆者なりの評価についても、ほとんど触れることが出来なかつた。これらはいずれ別稿を期すこととなるであろうが、河村の基礎的な部分の解明は出来たのではないかと思う。

註

- (1) 「祖国と青年」では「教育者 河村幹雄の思想と生涯——名著『名もなき民のこゝろ』の著者」(二〇〇六年九月号)、「河村幹雄博士の歌に見る教師像——「身はわかるとも心はわかれじ」」(二〇〇六年一〇月号)、「河村幹雄博士が説く「小定員学校論」——「群集心理」を如何に克服するか」(二〇〇六年一二月号)、「『斯道塾』開塾への歩み——「しきしまのやまのくにに人となり」」(二〇〇六年一二月号) というタイトルで四回連載された。占部研究では、河村の思想の中でも特に教育論に重点が置かれ、思想的な位置付けや史的意義についての言及は不十分な観が否めない。とはいふものの、河村の私塾である「斯道塾」についての論説は、その成立や意味について踏み込んでおり、見るべき価値のある内容を持っている。また、河村幹雄の思い出と回想を記したものとして和栗明「我らのビジョンを語る——教育のほかに何物もなしと叫ばれし河村幹雄先生を憶う——」(久留米工業短期大学・久留米工業高等専門学校『研究報告』第四号、一九六五年二月)がある。
- (2) 榎本の指摘によれば、「『岩波版として十数刷を重ねているし、その後清成迪氏、長谷川才次氏によって一万余部増刷頒布されているので、この書は意外に広く読まれて居り、また直接薫陶を受けた弟子たちの言葉に感銘を受け、博士を追慕する人が多い」(榎本『前掲書』二二二頁)とされており、河村の思想は一定の支持を受けたことを示している。
- (3) 榎本は河村の中学時代の級友である渥美亀太郎氏の一九四二年の話として「長男(重幹—引用者註)は海軍少将、次男が博士、三男(脩—引用者註)が今頃は海軍少将位かと存じます」(榎本『前掲書』一六頁)と紹介しているが、本稿では、笹月清美『前掲書』(一一四九—一一五四頁)に掲載されている「河村幹雄博士略年譜」の記述を採用する。
- (4) 榎本『前掲書』一七頁。
- (5) 河村の名は東京帝国大学が出した「東京帝国大学卒業生氏名録」(一九二六年)に記載されている。同書の三〇四頁には、同期一〇人中で最初に河村の氏名が掲載されており、地質学科では主席だったと思われる。榎本『前掲書』の年譜(一三八頁)には、卒業時に「銀時計一個を下賜せらる」と書いてあることから、理学部の中でも成績は上位であったとみてよいだろう。

- (6) 榎本『前掲書』一三九頁。
- (7) 河村の葬儀は「福岡市材木町安国寺で盛大に行われた」という。キリスト教徒であるはずの河村の葬儀が仏式だった理由を榎本は「察する所博士は死後の葬儀などに就いて何等言及されなかつたようで周囲の人々の取計いで家宗によつたものと思われる」(榎本『前掲書』一〇〇頁)と説明している。
- (8) この日の日記には「聖書を読む。午前十時十七分を読み終りぬ。小里君の熱き情を受けしより茲に三年の歳月を閲して我は始めて之を読み終り臘気ながら道を解するを得たり。神の前に身を横へて御心のままに為し賜へと祈る。」とある。これですぐに洗礼を受けたとはいえないが、この時期、既に、キリスト教への接近が見られることは留意すべきだろう。
- (9) ほぼ同様の記述が、斯道会『前掲書』所収の和栗明「基督教信徒としての河村先生」(二六二―二六三頁)にある。
- (10) 河村は「移民しようとすれば、濠洲、カナダ、カリフォルニアに於て我農民の能力の大有の爲めに門戸を閉ざれ、更にワシントン、オレゴンを始めテキサス、ネブラスカ等中部諸州に及ばうとしてゐる。(中略)天の我等に与へた地上に、己の額の汗で飯を食ふ事は各人の権利である筈だが、日本人には土地は売らぬ、否貸す事さへせぬ。草を生やして遊ばせて置く幾千万エーカーの肥地はあつても日本人の畝は入れさせぬ。臍くり金を隣人に貸すにも気兼ねせねばならず、七百人が殺されたと云ふ悲惨な事実あつたにつけて止むを得ぬ措置を取るすら痛くない腹をさぐられ、或は中傷、誹謗をうけねばならぬ」(河村幹雄「日本の将来」笹月『前掲書』三六四頁)と述べ、アメリカ国内で日本人に対する排撃運動が存在したことを述べている。これは、おそらく河村自身の直接体験に基づくものであらう。
- (11) 「断片」大正五年五月二八日(笹月『前掲書』六七六頁)。
- (12) 「断片」大正八年四月一日(笹月『前掲書』六七六―六七七頁)。
- (13) 「日記」大正六年四月廿七日付(笹月『前掲書』八五七―八五八頁)。
- (14) 「日記」大正六年四月廿七日付(笹月『前掲書』八五九―八六〇頁)。
- (15) 「日記」大正六年十一月廿九日付(笹月『前掲書』八七三頁)の記述によれば「帰朝の上爲すべき事を心覺えに記す。1、九州大学に文科教室を設ける事——心理、論理、倫理、宗教、哲学、史学、国史、東洋史(支那哲学)、経済を主とす。三井甲之助(三井甲之の本名)引用者註)を招聘する事」とあり、三井の文科系学部の設置の折には九州大学に三井甲之を招こうとしていた。しかし、三井はこれを拒んだようである。河村が死去した際に「原理日本」が追悼号を発行するが、その際に三井が書いた「河村幹雄兄の靈にさ、ぐるのり」と「思へば十数年前の昔である。わがふるさとの、わが家に突然たづねて来て庭の池のほとりに、立つておられた君のすがたを、ぼくは思ひ出す。これは君がアメリカから帰つて間も無いこ

とであつた。君は、ほくに君のそばに行くことをすすめられた。しかしほくは東京から遠くはなる、ことが躊躇せられたのであつた。」と書いていることから裏付けられよう。

- (16) 河村は、国内のポピュリズム的で国家・思想・教育問題を問題視しない新聞・雑誌を問題視し、批判を加えているが、そのなかで推奨すべき雑誌として「三井甲之助（三井甲之の本名―引用者註）氏。氏は『日本及日本人』に多く執筆す。大正五・六・七・八年の交、吉野博士其の他の偽新思想に加へし痛撃は大いに読むべきもの」（河村幹雄「アメリカニズム」『前掲、名も無き民のこゝろ』二一六―二一七頁）とし、河村自身が「日本及日本人」を読み三井を見知っていた可能性はある。ここでもう一つ重要なことは、大正デモクラシーのきっかけを作った吉野作造の学説を「偽新思想」と批判しているところである。拙著でも明らかにしたように、三井らは吉野らに対して批判攻撃を加えていた。河村は、三井らの自由主義排撃論に共鳴していた様子が理解されるだろう。

- (17) 河村英雄「前掲、名も無き民のこゝろ」二九頁。

- (18) 河村幹雄「アメリカニズム」『前掲、名も無き民のこゝろ』二一〇頁。

- (19) 笹月「前掲書」（一六六〇頁）に所収されている河村の「断篇」には、時期は分らないが、以下のような言論が掲載されている。

日本がどこまでも日本であり、英や米や独や仏に対して日本の特色を發揮する時―日本の特色は英米独仏の文化をそれぞれに味識して我を比ぶる時に明かとなるものである。従て『日本』と自覚する時日本の内容は世界諸民族の文化の最小公倍数となるであらう。

『日本』といふ名は世界に比べて小さいやうであるが、その内容は世界文化の異なる要素を悉く内に包含蘊蓄すること、最小公倍数がその名に小と冠せらるゝに係らず、問題とせらるゝ、数の中では最も大であり、その総てを己が部分として有するが如くである。

ここにみられる思想は、原理日本社が「綱領」の中で唱えた「世界文化単位の日本」というスタンスとほぼ同一であると見てよい。原理日本社の基本姿勢は、三井甲之の思想そのものの表現であつたことは、既に拙著で指摘したが、このことから、河村の思想には、三井甲之の影響が強く反映されていることがわかるであろう。つまり、三井甲之の思想は、知識階級の間でも一定の支持を得る素地を持っていたということである。確かに一部の人々からは、三井ら原理日本社の思想は從來指摘されるようなファナティックな言論・思想としてみなされ蛇蝎の如く嫌われていたことは間違いないが、一方では、河村のような支持者もいたということはファシズム思想成立の過程で決して見逃されてはならないであろう。

- (20) 河村幹雄「基督の信について祖国愛のうかゞはる、節々」(「前掲、名も無き民のこゝろ」三四六頁)。
- (21) 河村幹雄「祖国民衆主義と基督教」(「笹月」前掲書) 三五四頁。
- (22) 三井甲之の思想に親鸞がどういった影響を与えたかについては、石井公成「親鸞を讃仰した超国家主義者たち(一)——原理日本社の三井甲之の思想——」(「駒澤短期大学仏教論集」八号、二〇〇二年)という優れた論文がある。
- (23) 河村のキリスト教と親鸞に関する著作は、「基督教と親鸞」「基督の信について祖国愛のうかゞはる、節々」がある。
- (24) 河村幹雄「基督教と親鸞」(「前掲、名も無き民のこゝろ」三三三頁)。
- (25) 河村幹雄「前掲、基督教と親鸞」(河村「前掲書」三三四頁)。
- (26) 河村幹雄「前掲、基督教と親鸞」(河村「前掲書」三三五頁)。
- (27) 河村幹雄「前掲、基督教と親鸞」(河村「前掲書」三三九頁)。
- (28) 河村幹雄「前掲、基督教と親鸞」(河村「前掲書」三三八頁)。
- (29) 榎本隆一郎「前掲書」一四四頁。
- (30) 榎本隆一郎「前掲書」二九五頁。
- (31) 榎本隆一郎「前掲書」三三〇頁。
- (32) 竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代 大学批判の古層』(柏書房、二〇〇六年)。
- (33) 拙稿「原理日本社論の限界と錯誤」(「日本文化論年報」第一一号、神戸大学国際文化学部日本文化論大講座大学院総合人間科学研究科日本文化論講座、二〇〇八年三月)。
- (34) 拙稿「三井甲之と原理日本社の大衆組織——しきしまのみち会」(「古家実三日記研究」第五号、古家実三日記研究会編、二〇〇五年五月)において、原理日本社の下部組織で三井甲之の思想の直接的流れを受継ぐ「しきしまのみち会」の後継団体が、「国民文化研究会」であることは、既に指摘した。現在でも靖国神社の遊就館の第一展示室には、三井甲之の代表的短歌が掲出してある。